

# 高尾山泰基院照観寺高信講結講六十五周年 祈願道場佛遮那堂増改築

先達講元 小暮 栄住

高尾山泰基院照観寺高信講(群馬県太田市)は、昭和二十五年、初代講元大先達小暮熊蔵の発願と、当地の篤信者の懇請により設立され、今日まで正月、春、秋と年三回、高尾山薬王院へ参拝いたしてまいりました。

昨年(平成二十七年)、結講六十五周年を迎えるにあたり、平成十六年に建立した当講の祈願道場である、佛遮那堂(三休本尊・飯繩大権現、不動明王、聖観世音菩薩を安置)の増改築を発願し、このたび、信徒各位皆様のお力添えを賜り、無事完成いたしました。



増改築した本堂と小暮先達

だいております。本年、四月三十日には、信徒各位の皆様がご参列下さり、当堂の増改築奉告護摩供法要を厳修し、三休本尊様に世界和平、仏法興隆、講中講員信徒安全、諸願成就を至心に祈念させて頂きました。御本尊飯繩大権現様の御神力と御貫首猊下を始め、高尾山諸大徳の方々の御教示に、心より感謝申し上げます。

「生ある者はいつかは死す」この道理が解れば仏教がわかる、とも書いてあったが難解だ。私達は巡礼の間中、札所ごとに「般若心経」をお唱えしていた。この神仏に祈る姿こそが、巡礼をする日本人の心の姿なのだろう。

秩父巡礼は名残りの雪にも見舞われて足元が悪く、滑って転んだ友達もいたが、落合師が巡礼の諸般を整えて下さって、秩父観音霊場を無事巡拝することが出来た。また、原師のご厚意で、高尾山薬王院の護摩壇祭壇の掛け替えられた布で拵えた手作りのプローチをいただき、それが女性信徒の胸を飾っていた。堀江師のお話によると高尾山は今、若い僧侶たちが一生懸命活躍している。東日本大震災の復興支援のお手伝いや、被災されて亡くなられた方々の御供養をした時の様子を、お話するようにと云われたので、鈴木師が他

人の為に祈ることの大切さをお話し下さった。秩父巡礼の最後は番外のお寺であったが、原師の学友であった圓福禪寺御住職の法話を、早春の梅香漂う大寺の軒庇の下で伺うことが出来た。夕景の中で、巡礼者の白い笠帯が浮かび、絵を見ているようだった。また、第二十一番札所の観音寺の杉林には、芭蕉の句碑をはじめ、幾つもの句碑が建っていた。こんな句碑もあった。

鷹のうちの  
在りし日天皇の  
日を祝う  
まさお

これなども正に日本人の心の姿なのだと思つた。わたしは高尾山薬王院・巡礼会のお蔭で日本百観音を巡拝し、結願することが出来た。有難うございました。

百観音  
収めて春の  
光かな  
光子  
合 掌

## おはなし散歩道

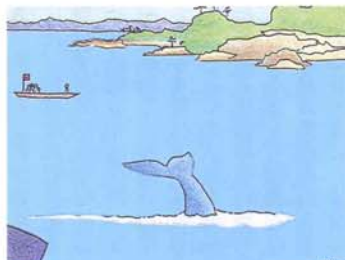
### 漁師の三平

湯沢町 富樫あい子

横浜村に住む漁師の三平は、伊勢エビみたいな鼻をしていた。  
「エビ!そでかい鼻で漁場をかきあてろや!」  
不漁の日には仲間たちが三平をからかった。  
梅雨の雨が、しとしとと降る朝のこと。  
三平は浜に出て、ゴマ粒みたいなものを口に含み潮の匂いをかいだ。  
「ヒラメ?タイかな?」  
首をかしげて漁に出た。その日から何となく魚場をかき当てた。  
三平のかみさんは、そんな日が数日続くもので、「夫の鼻は天下一品!漁場をピタリと当ててる!」夫をエビ鼻とバカにする仲間は大ボラを吹き、自慢した。聞いた漁師は、「そんな事があるものか」と笑い飛ばした。  
漁師たちは考えた。

「今年はいワシが獲れんが、あのエビ鼻を試そう」といいた。  
翌日、三平は洩々みんなと船に乗り沖に出た。空を見ていた三平が、「ニワトリが逃げた。おれは帰る。帰る!」突然、大声で叫んだ。「バカな。ここは海だ!」漁師たちは引き留めたが、三平には心当たりがあった。うっかり者のかみさんがニワトリにエサをやると、小屋の戸締りをいとも忘れるのだ。しぶしぶ漁師が引き返すとビツクリした。ニワトリが宙を舞いおかみさんが大騒ぎしていた。「エビは本当にきき鼻になったのか?」漁師たちの噂が噂をよび江戸の殿様の耳に入った頃には大げさにも、「三平の鼻は千里先の物

もかき分けるそうだ」といふ話に変わっていた。その頃、江戸城では、「殿が納涼祭にクジラを見た!」といい家来が頭をかかえていた。噂を聞いた家臣が殿に話すと、「三平を城に呼べ。クジラをかき当て江戸湾に泳がせよ」と命令を出した。(困ったことになった!)



感謝したのだった。「おぬしの鼻はみごとだ。わしの仲間みたいだのお」大男は三平の鼻が気に入ったようだ。「役に立たない鼻で……」三平は、ゆでエビみたいなに赤くなった。「立派な鼻だ。これは礼だ。この薬を飲むがいい」大男は黒ゴマみたいな薬を差し出した。「きき鼻になるぞ」といって別れた。そのゴマ粒を三平は漁に行く前に浜で飲んでいたので。「おい。早く城に参れ!」家臣が何度も催促にやってくるうちに、いつしか



お山に向かっていた。三平は参道の杉の木の下にたずねると、「おい」とつぶやいた。顔をあげると赤い顔に長い鼻、背中に羽を付けた天狗の大男そっくりの天狗だった。「やつぱり来たか、殿様に呼び出されたそうだな」天狗はカラカラ笑いながら三平を見下ろした。「笑い事じゃありません」「怒るな。天狗の鼻毛を丸めろ。三平はいきなり城に向かって飛んだ。天狗も空へと舞った。入梅が明け、じりじりと暑い日が続くころ。江戸湾にクジラが泳いでいるという噂に、見物客が大賑わいだという。あの丸薬が、天狗の鼻くそであることは、三平は知らないのだった。(おわり)

(さし絵・小出 茂)